

ベネデット・コトルリ『商業技術の書』 ——翻訳と解題（1）

伊藤 博明

はじめに

15世紀初頭にダルマチア地方のラゲーザ（現在はクロアチアのドゥブルヴニク）に生まれ、1469年にイタリア中部の都市ラクイア（L'Aquila）で没したベネデット・コトルリ（Benedetto Cotrugli）、あるいはベネディクト・コトルリ（Benedikt Kotruli）は、ルネサンス期に活躍した、人文主義的な教養に溢れる商人・外交官であった。彼がナポリで1458年8月に完成したと考えられる、イタリア語の『商業技術の書』（*Libro de l'arte de la mercatura*）は、1573年になってようやくヴェネツィアで『商業および完全な商人について』（*Della mercatura et del mercante perfetto*）

というタイトルで刊行されたが〔図1〕、会計史家の間では、これまで常に問題とされていた書物である。というのは、その第1巻第13章に、「複式簿記」（*doppio partite*）の説明と見なされる記述が存在するからである。

もしそれが事実であれば、「複式簿記」については、コトルリは会計史上の金字塔と言うべき、1494年にヴェネツィアで刊行されたルカ・パチョーリ『算術、幾何、比例、比率の大全（スンマ）』（*Summa de arithmetica, geometoria, proportioni et proptonalita*）の36年ほど前に先だっていたことになる。当該のテキストには、詳しい具体的な説明が欠いていたためになかなか結論にいたらなかったが、1963年以降にフィレンツェの国立中央図書館およびマルチェリアーナ図書館で発見された二つの写本、そして1989年にヴァレッタのマルタ国立図書館で発見された新しい写本〔図2〕が知られるようになって研究が進展した。その結果、1573年版の当該の箇所は改竄（短縮）されたものであり、元来は複式簿記についての十全な記述が見られることが明白なものとなった。そして、新しい校訂版が2009年にザグレブとドゥブルヴニクで、2016年にヴェネツィアで刊行された。

さらに2018年には、この新しい校訂版をもとにして、イタリア人の経済ジャーナリスト、アレッサンドロ・ヴァーグナーが大胆に編纂し直し、『名誉とともに富むこと——善き企業家の礼讃』（*Arrichirsi con onore. Elogio del buon imprenditore*）と題して刊行された。筆者はこの著作の本文



図1 ベネデット・コトルリ『商業および完全な商人について』 フランチェスコ・パトリッツィ編 ヴェネツィア 1573年

解題——ベネデット・コトルリの生涯 と『商業技術の書』



図2 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』
ヴァレッタ マルタ国立図書館

ms 15, page jb. From: *Libra XV: Cotrugli and De Rapheli on Business and Bookkeeping in the Renaissance*, Facsimile ed. by Alan Sangster, Stirling: Lomax Press, 2014.

(解説などを除く)の邦訳を、2021年7月に『世界最初のビジネス書——15世紀イタリア商人ベネデット・コトルリ 15の黄金則』(すばる舎)と題して出版した。また、令和4年専修大学研究助成(個別研究)「研究課題 ベネデット・コトルリとルネサンス人文主義」の交付を受け、その成果の一部として「ベネデット・コトルリ『商業技術の書』の「発見」と刊行(1)」を『専修人文論集』第111号(2022年11月)に、およびベネデット・コトルリ『商業技術の書』の「発見」と刊行(2)」を『専修人文論集』第112号(2023年3月)に発表した。

本稿では、以上の翻訳と研究成果を踏まえて、コトルリ『商業技術の書』の第1巻第1～5章の邦訳を試みることにしたい。だが、その前に、先の二つの拙稿と一部重複する箇所はあるが、簡単にコトルリの生涯と『商業技術の書』を紹介するとともに、邦訳が底本とする『商業技術の書』のテキスト自体の問題に触れておきたい¹。

ベネデット・コトルリは16世紀初頭に、アドリア海の東海岸に位置する、ダルマチア地方最南部の都市に生まれた。現在はクロアチアのドゥブルヴニクと呼ばれ、頑丈な壁で囲まれた旧市街は世界遺産に登録されている[図3]。中世からルネサンスにかけては、ヨーロッパとバルカン半島を仲介する商業都市として栄えており、コトルリが生きた時代はヴェネツィアの支配から脱して独自の発展を開始した時期に当たる。

コトルリ家は当地の有力商人層として知られていた。彼の父のジャコモ・ルスコは、ナポリ王国を筆頭にして広範な地域で商業活動を展開する一方で、ハンガリー王ジギスムントやナポリ女王ジョヴァンナのもとに、都市の外交使節として派遣されている。彼はサントニオ・グランデ商業同心会に属しており、その会員の娘であるニコレッタ・イリックと結婚して8人の子どもを得た。その3番目の息子がバンコで、イタリア語風にベネデットと名づけられた。生年は1415年、あるいは1416年と推測されている。

ベネデットは少年時代から聡明で、父の仕事を継ぐべく、将来を待望されていたようである。



図3 ラゲーザ(現クロアチア、ドゥブロヴニク)
旧市街

そして、兄弟の中で彼だけが、1340年頃、ヨーロッパで最も古く、イタリアで最も有名だったボローニャ大学に送られ、法学と哲学を学んだ。このときに培った教養と学識が、後年のナポリの宮廷における旺盛な活動を助け、またその痕跡は『商業技術の書』にいかんなく発揮されている。

1434年に、数年前からナポリで暮らし、そこでラゲーザ領事と造幣局長を務めていた父が倒れる。彼は父を助けるために同年、ナポリを訪ねるが、2年後に父は死亡し、ベネデットは一族の活動を取り仕切るために、ラゲーザに戻るようになった。学業を中断せざるをえなかった悔しさは、『商業技術の書』の「序文」によく表現されている。「私は、まさにわが哲学研究の最高潮のときに、研究から引き離され、商人になるように定められ、全身全霊を傾けていた研究の甘美な悦びを諦めた」。

コトルリはラゲーザに到着するやいなや、弟のミケーレ、伯父のイヴァン、サンタントニオ・グランデ同心会に属する二人の商人、ニコラとシジスモンドのデュルデュヴィク兄弟に協力を仰いだ。そして、父のあとをしっかりと継いで事業を展開していった。それから15年以上、彼は精神と身体を駆使して休むことなく商売を続け、常に多忙に過ごした。しばしば、自らの商品を船に積み、ヴェネツィアの船団とともに地中海を航海した。バルセロナに滞在して、カタルーニャ産の羊毛をイタリアの諸都市やラゲーザに輸入した。その旺盛な商人、企業家としての経験から得た豊かな知恵は、『商業技術の書』の随所に見てとることができる。

コトルリが居を構え、仕事をした場所は現在のドゥブロヴニクで同定されている。ドゥブロヴニクの旧市街、ピア門から入場しプラツァ通りを進んだ突き当たり、ルジャ広場に面した場所（現在はレストランのドゥンド・マロイエ）



図4 コトルリの仕事場（現レストラン、ドゥンド・マロイエ）ルジャ広場 ドゥブロヴニク 筆者撮影（2023年8月）



図5 コトルリの銘板 コヴァカ通り ドゥブロヴニク

筆者撮影（2023年8月）

〔図4〕から入るコヴァカ通りの入口には、2008年に地元の顕彰団体によって次のような銘文が置かれている〔図5〕。

U OVOJ KUĆI ŽIVIO JE I RADIO
HRVATSKI I SVJTSKI EKONOMIST
BENEDIKT KOTRULJEVIĆ
DUBROVNIK 1416. – L' AQUILA 1469.

クロアチア人で世界的経済学者
ベネデット・コトルリは
この家に住み、働いた。

ドゥブルヴニク 1416年 — ラクイ
ア 1469年

また2007年には150クーナの記念銅貨が発行されている。表側〔図6〕には中央にコトルリの肖像が描かれ、それを囲むように BENEDETTO COTRUGLI RAGUSEO「ラゲーザ人、ベネデット・コトルリ」と彼の名がイタリア語で記されており、外側の円環には BENEDIKT KOTRULJEVIĆ 1416.-1469. とクロアチア語で記されている。裏側〔図7〕には中央に積まれた硬貨が描かれ、その周りに DEL ARTE DI MERCATURA / O UMIJEĆU TRGOVINE とイタリア語とラテン語で「商業技術について」と、外側の円環には 150 KUNA 2007. REPUBLIKA HRVATSKA「150クーナ2007年クロアチア共和国」と記されている。

1444年、ベネデットは、父と同様に、サントニオ・グランデ同心会に属していた一族

の女性、ニコレータ・ドブリック=ボズイク、あるいはニコレッタ・ナターレ・ボンデナリーヨと結婚する。そして、結婚後、ベネデットは1445年から48年の間、フィレンツェの商人、フランチェスコ・ネローネとさまざまな取引を行い、ネローネは彼に織物のための染料を売買している。当時のフィレンツェは、メディチ商会を始めとして貿易業と金融業が栄え、彼らのマーケットは全ヨーロッパばかりかコンスタンティノーブルやダマスカスまで及んでいた。しかし、こうした商業活動にもまして、ベネデットに深い影響を与えたのはフィレンツェの人文主義文化だったことであろう。その後、コトルリは1450年にナポリに移住したが、ナポリの文化的で知的な魅力が彼を惹きつけたのかもしれない。いずれにせよ、コトルリは周到に準備して、同年に商会と財産を弟のミケーレの間で分割し、自分の息子たちはミケーレの元に預けた。彼は1451年の初頭に、ナポリの近く、ヴェスヴィオ山の麓に身を落ち着けた。

『商業技術の書』はラゲーザの商人で、コトルリの義弟のフランチェスコ・ディ・ステファノに捧げられ、全4巻から成っている。当時の学問的論考はラテン語で書かれるのが常であったが、本書は俗語（イタリア語）で書かれている。その理由をコトルリは、商人たちが実際に読むことができるようにするためである、と説明している。

コトルリと同時代に俗語で執筆された論考には、フィレンツェの人文主義者レオン・バッティスタ・アルベルティの『家族論』（*Della famiglia*, 1440）があり、コトルリ自身が参照した可能性がある。実際、『家族論』の内容は、『商業技術の書』の第四巻に対応している。『商業技術の書』の内容は次のとおりである。



図6 コトルリ記念銅貨 表 2007年
クロアチア共和国



図7 コトルリ記念銅貨 裏 2007年
クロアチア共和国

序文	いて
第1部 商業の起源と原理について (De origine et principio de la mercatura)	(De lanaioli et altri mercanti d'arte)
第1章 [商業の起源について] (De origine de la mercatura)	第18章 商人に固く禁じられている事柄 について (De cose prohibite omnino a li mercadanti)
第2章 商業の本質と定義について (De la qualità e definizione di mercatura)	第19章 7年ごとに行うべき貸借清算に ついて (Del saldo si dè fare ogni VII anni)
第3章 商人という個人の性質について (De la qualità de la persona de lo mercante)	第2部 商人にとって必要な宗教について (De la religione che conviene a lo merchante)
第4章 商人に適した場所について (De lo loco abile a lo mercante)	序言
第5章 物々交換の取引について (De lo vender a baracto)	第1章 ミサについて (De la messa)
第6章 現金の取引について (Del vendere al contante)	第2章 祈りについて (De oratione)
第7章 掛売りの取引について (De lo vendere al temine)	第3章 慈善について (De elemosina)
第8章 回収の方法について (De lo modo de lo scodere)	第4章 良心の許される、そして許されな い場合について (De casi de consciencia liciti et illiciti)
第9章 負債の支払いについて (De lo pagare lo debito)	第3部 商人の市民生活について (De vita politica de lo mercante)
第10章 取引の方法と一般的順序につい て (De lo modo universal et ordene de lo traficare)	序言
第11章 換金について (De li cambii)	第1章 商人の名誉と尊厳について (De lo office e dignità de lo mercante)
第12章 借入と担保について (De lo deposito e de lo pegno)	第2章 商人の賢慮について (De la prudencia de lo mercante)
第13章 商業的な仕方で帳簿に記載する 方法について (De l'hordene de tenere le scripture con ordine mercantile)	第3章 商人の学知について (De la sciencia de lo mercante)
第14章 保険と保険業者について (De le sicurtà et sicuratori)	第4章 商人の信頼について (De la confidentia de lo mercante)
第15章 宝石商について (De gioiellieri)	第5章 商人の幸運について (De la fortuna de lo mercante)
第16章 織物商と小間物商について (De drapieri et merciari)	第6章 商人の誠実さについて (De la integrità de lo mercante)
第17章 羊毛商と他の手工業の商人につ	第7章 商人の勤勉さについて (De la diligentia de lo mercante)
	第8章 商人の迅速さについて (De la facilitate de lo mercante)

第9章 商人の巧妙さについて (De la astucia de lo mercante)	第10章 商人の最期について (De la fine de lo mercante)
第10章 商人の上品さについて (De la urbanità de lo mercante)	
第11章 商人の公平さについて (De la iustitia de lo mercante)	
第12章 商人の堅固さについて (De la constantia de lo mercante)	
第13章 商人の威厳について (De la auctorità de lo mercante)	
第14章 商人の鷹揚さについて (De la liberalità de lo mercante)	
第15章 商人の平静さについて (De la tranquillità de lo mercante)	
第16章 商人の謙虚さについて (De la modestia de lo mercante)	
第17章 商人の賞讃されるべき条件について (De le laudabili condecioni de lo mercante)	
第18章 商人の節制について (De la temperantia de lo mercante)	
第4部 商人の商業上の徳について (De lo mercante, circa le virtù icognomiche)	
序言	
第1章 家屋について (De la casa)	
第2章 別荘について (De la villa)	
第3章 家政について (De lo yconomo)	
第4章 衣服と装飾について (De le veste e ornamenti)	
第5章 家具と調度について (De masarie et supelectili)	
第6章 妻について (De la muliere)	
第7章 子どもたちについて (De figlioli)	
第8章 使用人と家族について (De servi et famigly)	
第9章 地所について (De peculio)	

最後の言葉は以下の通りである。「ここに、フランチェスコ・デイ・ステーファノのために、ベネデット・デイ・コトルリによって記された『商業』(Mercatura) という書物は終わる。神に感謝を。疫病がナポリの町に蔓延しているとき、セルピコにて。主の年、1458年8月25日。アーメン」。

商人としての必要な実務的な知識や情報を体系的に記述した「商売の手引き」というジャンルは、13世紀末のイタリアにおいて成立し、16世紀以降はヨーロッパ中に広まっていった。コトルリの『商業技術の書』もその中に含まれるのであるが、しかし、本書の第3部と第4部で説かれている商人としての知識と道徳と生活様式は、このような種類の書物としては異例である。たとえば第3巻の序文においては、商人は良い著述家、数学者、財務の管理者だけではなく、高い教育を受け、巧みな修辞家であることが重要であり、さらにラテン語については、契約などの業務にとっても有益である、と説いている²。

また、多くの古典的著作からの引用を含む叙述は、むしろ人文主義的な著作を彷彿とさせる。たとえば、冒頭の第1巻第2章「商業の本質と定義」においては、キケロの『義務論』(1, 2, 7)を参照しながら、「正しい順序を保つために、われわれは、商業とはいかなるものであるかを述べよう。というのは、キケロが述べているように、諸事象を正しく理解するためには、それを定義することから始めなければならないからである」と記している³。このような観点から、『商業技術の書』は、会計史的な関心の枠に留まらず、イタリア・ルネサンスの諸著作の中でもきわめてユニークな書物と評される所以であ

る。

コトルリは1458年初頭に、祖国のラグーザから、金銭上の問題によって追放処分を受けていた。彼はその後、アルフォンソ5世とフェルディナンドのもとで、ナポリの造幣局長、裁判官、大使などの要職を務め、1469年にアブルツォ地方のラクイラに転居して、同年、ほぼ54歳で亡くなった。息子のヤコボが彼の跡を継いで、一族の商業活動を継続した。娘のカテリーナはラクイラで結婚し、別の娘のエレオノーラはナポリの聖ジロラモ修道院に入って尼僧になった。下の息子のジロラモはラグーザに留まった。

ベネデット・コトルリ再評価の動きは、祖国クロアチアにおいて、1985年にクロアチアの芸術・科学アカデミーによる、1571年のヴェネツィア版『商業と完全な商人について』の再刊から始まった。次に、アカデミーが主導して、クロアチアの商業・会計関係の諸学会・協会の協力のもとに、「ベネデット・コトルリの生涯と著作についての事実を確立し」、「われわれの経済学的知識への彼の寄与を評価し」、「とりわけ、記述された二重簿記のシステムの形成における彼の先駆性を決定する」ためのセミナーが開始された。その成果は27名による25本の論考を収録した『ドゥブルヴニク人ベネデット・コトルリ——15世紀のクロアチア人で世界的経済学者』（1996年）⁴に結実した〔図8〕。

一方、すでに述べたように、1963年以降にフィレンツェの国立中央図書館およびマルチェリアーナ図書館において、コトルリの『商業技術の書』と題された2つの写本が発見され、それらを底本として、1990年にウーゴ・トゥッチが校訂版をヴェネツィアで刊行した⁵〔図9〕。そして新たに、1989年にヴァレッタのマルタ国立図書館で写本が発見されたが、これら三つ



図8 『ドゥブルヴニク人ベネデット・コトルリ——15世紀のクロアチア人で世界的経済学者』 ザグレブ 1996年



図9 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』ウーゴ・トゥッチ編 ヴェネツィア 2016年

の写本（と1573年ヴェネツィア版）を詳細に検討して、それらの関係を明らかにしたのが、1993年に発表されたティツィアーノ・ザナートの「ベネデット・コトルリの『商業』についてのテキストをめぐって（最新の校訂版に関して）」⁶である。

ザナートの研究成果に基づいた新しい校訂版は、2009年にザグレブとドゥブプロヴニクで、

ズデンカ・ヤネコヴィチ＝レーマーが編集した、クロアチア語との対訳版が『商業技術の書』(Libro del arte dela Mercatura) として刊行された⁷ [図10]。2016年にはヴェネツィアで、ヴェーラ・リバウドが編集した『商業技術の書』(Libro de l'arte de la mercatura) が、ティツィアーノ・ザナートの序文を付してデジタル

上で刊行された⁸ [図11]。そして2017年に英訳が、カルロ・カッラーロとジョヴァンニ・ファヴェロの編纂によって刊行された⁹ [図12]。その後(2022年9月)、リバウド版は現代イタリア語訳とともに書籍として刊行されている¹⁰ [図13]。なお、2008年には、1582年に刊行された仏訳『商業と完全な商人についての論



図10 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』ズデンカ・ヤネコヴィチ＝レーマー編 ザグレブ/ドゥブロヴニク 2009年



図11 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』ヴェーラ・リバウド編 ヴェネツィア 2016年 (デジタル・パブリッシング)

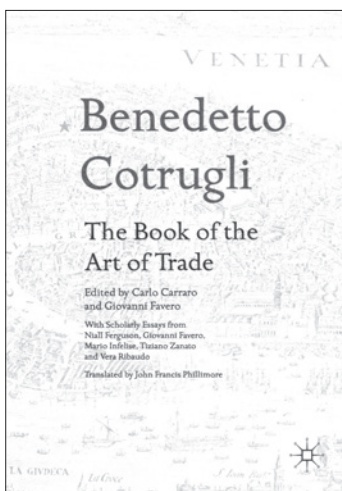


図12 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』(英訳) カルロ・カッラーロ/ジョヴァンニ・ファヴェロ編 クラム (スイス)



図13 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』ヴェーラ・リバウド編 ヴェネツィア 2016年 2022年



図 14 コトルリのブロンズ像 ボルヌ・ブラニミラ通り／クネツ・ミスラヴァ通り ザグレブ 筆者撮影（2023年8月）

考全4巻』（*Traicté de la marchandise et du parfait marchand disposé en quatre livres*）¹¹が再刊されている¹²。

このように20世紀後半から21世紀にかけて、コトルリと彼の『商業技術の書』に関する研究は飛躍的な発展を遂げた。その動きと呼応するかのよう、すでに紹介したように、コトルリの生地である現ドゥブルヴニクの旧市街の小路の壁には、2008年に地元の顕彰団体によって

銘文が置かれた。そしてクロアチアの首都ザグレブの中心地に近い、ボルヌ・ブラニミラ通りとクネツ・ミスラヴァ通りが交わる、ホテル・シェラトン前の小広場にはコトルリのブロンズ像が建てられ〔図14〕、その前に置かれた銘板には次のように記されている。

HRVATSKI EKONOMIST
DUBROVČANIN
BENEDIKT KOTRULJEVIĆ
TRGOVAC, POLITIČAR, DIPLOMAT,
FILOZOF I PISAC

1400.-1468.

クロアチアの経済学者

ドゥブルヴニク人

ベネディクト・コトルリ

探求者、政治家、外交官

哲学者、そして作家

1400年～1468年

（生年・没年は原文のママ）

翻訳にあたって底本としたのは、上述したりバウドによる校訂版（2016年、2022年）である。また、上述した現代イタリア語訳（2022年）と英訳（2017年）を参照した。

翻訳 ベネデット・コトルリ 『商業技術の書』

——フランシスコ・ディ・ステーファノに

[序文]

序文がここに始まる——幸運にも。

学識のある人々は身体の美や幸運と同様に、また魂の強さと徳にも喜びを見いだすのが常である。後者は多くの事柄を経験したことだけではなく、また、彼らを経験して学んだことを、書かれたものという永遠の記憶に委ねて、後代の人々に教訓を広めることに存する。そして私は、書かれたものに委ねられた教訓よりも心地良く、必要不可欠で、賞讃に値し、際立つものは何も見いださない。それゆえ、長い時を生き、あるいは多くの事柄を読んだ者たちはすべて、熟練者として讃えなければならないということになる。というのは、短い時間で、そしてとりわけ何も読まなければ、多くの事柄を知りうることは困難で、ほとんど不可能だからである。それゆえ私は（知慮深く学識ある人々の教訓から得たのであるが）、いわば粗野で、人間的な事柄に未熟な若者たちは、賢明な者として賞讃されるに値しないと判断する。

それゆえ、私はしばしば、魂の善を軽んじ、顧みず、自らのあらゆる幸福と至福を、運命が惹き起こす不安定さと幻滅さの中に割り当て、置いた者たちの怠惰、あるいは無気力に少なからず心から驚かされる。そして、もし彼らがあらゆる事柄を注意深く考察するならば、とりわけ自分の外部ではなく内部において探求するならば、もし彼らが神から最高の素質を恵まれ、飾られているならば、彼らは、外部に置かれている事柄は「幸福をもたらさないことを」明白に理解するだろう。それゆえ彼らは、それを欠いていても探さないだろうし、もしもっているならば、それをきわめて巧みに用いて、すばらしい利得を生み出すだろう。というのは、われわれ人間は、身体と魂から構成されており、前者によって野獣と似ており、後者によって神と似ているからである。われわれはすべて身体によって死に、魂によって不滅である。

もしわれわれが、精神の理性と知性を用いようとするならば、これら地上的な事柄はわれわれに隠されてはならないし、また上位の、永遠の事柄はわれわれに知られずにいてはならない。それゆえわれわれは、注意深く、われわれが野獣の生を歩むのではなく、不滅なる者の生を歩むように見えるように遵守すべきことを熱心に探し求めなければならない。これらの事柄を魂の善ではなく、むしろ運命の脆さ、弱さ、理不尽さの中に探し求める者は、これらを希望と自ら間違えて、彼の労苦は無益で無駄になるのである。

われわれはこれらのことすべてを全体として考察して、そして、われわれの刻苦精励を、われわれの後に来る者たちに分け与えようと望んで、日々の実践のおかげでわれわれが知り、そして、私の最も美しい哲学研究の最中に、研究から引き離され、商業に没入するこ

とを宿命と偶然が許した瞬間から、われわれが才智という手段によって試みた、商業という技術について語ることにしよう。これに私は、心底から没頭していた研究の歓喜と甘美さを放棄して、無理やり携わらなければならなかったのである。

そして、この商業技術の中に私は、不適當で、不規則で、無秩序で、恣意的で、無益な教訓を見いだした。私がひどく憐れみを感じ、哀しかったのは、必要で有益なこの活動が無知で、無頓着な人々の手に委ねられた結果、基準がなく、秩序がなく、濫用され、法がないままに営まれており、賢い者たちからは齒牙にもかけられず、無視され、品位のないものと見られ、無知な者たちの餌食とされ、放浪者たちの無駄話とされていることだった。

それゆえに、私は幾度も執筆し、教訓を与え、この技術に有益な規則をもたらし、人々がそれを冗談、猥雑さ、虚偽、不信心、偽証、放恣へと矮小化し、尊敬されるものでも探究されるものでもなく、謙虚さと真面目さを欠き、完全に人間の義務を失った、極端に下品な振る舞いとする誤謬と濫用を除外しようとした。しかし私は、さまざまに多様な緊急の必要と専心のために、とりわけ、私にはかくも親しい——これは理解されることができであろうが——わが祖国から離れて暮らしていたために、長いあいだ書くことをなおざりにしていたが、あなたが、私にとっても親しいフランシスコが、私の激励者、懇願者として私を助けに来たのである。あなたの懇願を叶えようと思って、私は商業の技術について考えていることを書き記するように掻き立てられた。またとりわけ、あなたに書くことによって、多くの者に、とりわけ、名誉をもって、神と隣人を辱めることなく利得を得ようとする意志と欲求をもっている者たちの益になることを、私は疑っていない。

この商業は、技術と呼ばれようとも、あるいは、それ自体の中にもつ、またもたねばならない多様な可変性のゆえに、また毎日起こる出来事の多様性のゆえに、特定の規範を欠いた学識と呼ばれようとも、しかしながら、自らの中に、一般的、また個別的な、ある特定の規則を有しているのであり、それらは、若者たちや青年たちのように、賞讃されるべき収益を得ようとする意志のある者たちによってよく理解されなければならない。というのは、哲学者たちの君主〔アリストテレス〕が『靈魂論』第二巻で述べているように、「行為者の作用は、受容者の準備が整っている時のみ存続する」¹³からである。それゆえ、汚染され、硬直した者たち、商業の不法な実践の中で年老いた者たちは、強情で、無能で、更生はできない。

しかし、商業は、もしよく彫琢され、正しく実践されるならば、それは大いに有益であるばかりか、また人間の生活にとってきわめて必要なものであり、その結果として、最も高貴な技術である。キケロは商業に言及して、「商人たちは国家の資産である」¹⁴と述べ、善き、熟練し、精通した商人たちについて語っている。それゆえアリストテレスが述べているように、都市の基本的で、必要な装飾の一つは商業であり、それから、あたかも一つの源泉からのように、その他の諸活動が発するのである¹⁵。というのも、それは歪められても損なわれてもいないからである。だが商業は、上述したように、それ自体の中にもつ

多様な可変性のゆえに難しく、それゆえ、次の一般的で使い慣わされた格言が用いられる。「法律の裁判官よりも商人となる方が手間がかかる」。というのは、あらゆる学知は自らの規範と自らの規則をもっており、それらを遵守することによって、当の学知において人間は完全になるのであるが、商業だけが、その判断の能力のうちで、毎日、毎時働かさなくてはならない、それに固有の本性的知性の探求に存しているからである。

それゆえ、私は筆を取ることを決心したのだが、私の著作をいかなる言語によって書くべきか、ラテン語によってか、それとも母語である俗語 [イタリア語] によってかを決めかねていた。双方からの理由が私の心に起こってきて、さまざまな仕方で、私をあるときは一方へと、あるときは他方へと押しやるのだった。実際のところ、ラテン語を支持して、私は、この言語が俗語よりもはるかに適切であり、論考の内容をはるかに優雅に説明することができ、作品にきわめて大きな威厳を与えるだろうと考えた。俗語を支持して、私は、この作品は商人たちの利得のために書かなければならず、彼らはその技術の知識の欠陥によってではなく、[ラテン語の学習で] 形成されないという悪しき慣習のゆえに、ほとんどの場合、ラテン語に通じていなく、無知なのであると考えて、われわれの著作が向けられている者たちの利得のために、おそらく商人たちにとってより一般的で、より理解しやすい言語において執筆すべきであろうと私には思われた。

この理由だけのゆえに、私はラテン語で執筆しようという当初の意図から離れて、結局、俗語で執筆することに決心した。このことについては許しを乞わなくてはならないが、上述したように、私は商人たちの利得のために行うのである——たしかに、こうした結果、ラテン語で執筆したときほどには、この著作が考慮の対象にならないかもしれないが。そして、このわれわれの著作が、たんにこの世紀の商人たちだけではなく、またのちに世紀の商人たちにも——彼らの手に幸運にも届くことになるならば——有益であることを望んで、われわれはこのわれわれの著作を正確な順序に従って進めるように配慮した。それゆえ私には、このわれわれの著作を四つの巻に分けるのが必要であると思われる。すなわち、第一部では、われわれは商業の発明、形態、実態について、第二部では、商人が宗教と神的な礼拝を遵守しなければならない方法について、第三部では、道徳的および政治的徳に関わる商人たちの品行について、第四部の最終巻では、商人がいかにして家、家族、経済生活を治めなければならないかについて取り扱う。こうして、神の御加護のもと、われわれの諸巻が終わりますように。

序文 終わり。

[第1部] 商業の起源と原理についての論考が始まる。

第1章

当然のことであり、また哲学者たちの権威によって明白に証明されていることであるが、人間の統治に属していることはすべて、それがもしきわめて正しく、また適切に統治されているならば、最初に知性において形成され、次のように秩序づけられていなければならない。すなわち、それが実践へと進む際には、外的実践に進むまえに内的な知的作用が必要であることは、明白に証明されうる。その内的な知的作用は理論的と呼ばれるもので、あたかも母からのように、それから実践的なものが進みであるのである。そして、理論的なものが、求められている然るべき仕方でも秩序づけられているときには、自然の娘であるように、実践的なものは理論的なものの娘である。

そして、作家に求められるように、諸事物の本性を深く考察しようとする者にとって必要なのは、全能の神が、世界の創造するにあたって、あらゆる事物をその各々にとって本性的な条件によって秩序づけたということを理解することである。そして、この秩序はわれわれの最初の父祖〔アダム〕の罪によって破られたので、世界の統治と人類の救済のためには、書かれた律法が必要とされたのであり、それはわれわれの救済者である神によって表された意志により、何に従うべきか、そして反対に何を避けるべきかを明らかにしている。そしてこれが、すべての預言者の中で最も古いモーセの手によってイスラエルの民に与えられた律法だった。

そして、多くの時ののちに上述の律法は、遵守すべき者たちの過失により、予定されていたはずの結果をもたらすことができず、その結果として、人類の救済のために別の、新しい律法を導入することが必要となった。この律法は古い律法を正すだけでなく、また遵守すべき者たちの善行により、それを遵守する報酬は儂く束の間のものではなく、むしろ堅固で永遠のことを明らかにした。これが福音の律法である。

ところで、世界の創造において、自然的な事物には、自然の本能によって理解されるべきものが定められたのであるから、最初に、何が外部からなされるべきなのかを、次に内的な知性によって、何が効力と作用をもたらすべきなのかを理解しなければならない。そして、この知性は外的な行為へと進むまえに、自然的秩序へと与えられたのであり、理論的と呼ばれるのであるが、それはギリシア語の語源に遡って、「諸事物の内的な思索と考察」を意味する。そして、この知性は自然的本能と多くの事柄の考察によって、外的な行為へと進むことを、すなわち、人類にとっての有益さにために内的に理解されたものを現わすことを可能にする。

この方法によって最初の哲学者たちは進んだのであり、彼らは異教徒ではあったが、自然の光によって照らされ、熱心に自然の秩序について探究し、それを理解すると、それを外的な実践へと適用させた。このようにして、最初の哲学者たちは自然的秩序の理論的な観察者であり、彼らに続く者たちは実践家で、先行者たちが多大な努力と驚くべき知性に

よって把握し、考察したことを実行したとすることができる。それゆえわれわれは、実践的なものは理論的なものの子であり、そして理論的なものは自然の子であり、さらに自然は神の子であると結論することができる。この順序で考えを進めていくと、われわれは、内的な知性と自然的物事についての考察がなくては、外的な実践の結果へと正しく進むことがまったく不可能であることを理解する。

先に述べたことから明らかなように、それらの技術、とりわけ実践に存している技術は、自然的諸事物の秩序を考慮しながら、自然から進みでていることが見てとれる。そして、このようになるべきなのだが、それにも関わらず、ときおり反対の順序に進んでいるように思われる。というのは、多くの個別的事例から経験と推量によって、諸学芸と諸技術の根拠である、より一般的なものの認識に達することが示されるからである。このことは明白な経験から、とりわけ二つの個別的事例から明らかである。その一つは、さまざま仕方で、さまざまな場所で、さまざまな人について、さまざまな時に試される薬草の経験による。たとえば、その一例はルバーブ [ダイオウ] であり、それはその本性によって常に、あらゆる場所で痲癩を治すので、そこからあらゆるルバーブは痲癩を治すという一般的な規則と原理が導かれる。

そして同じことは、弁論術についても言いうる。というのは、それが見いだされるまえに、ある人々はその本性によってこの技術に精通しており、自然的な実践から生まれた、この術が見いだされた後に行われるのと同様に、弁論のあらゆる部分で必要とされるものを巧みに行うからである。このことは、ボスニア人の間で起こるのであり、それは周知のことである。彼らは本性的に、その技術やその規則をもつことなしに、驚くべき仕方で弁論を行うのであり、それを自然的な本能によって所有しているのである。

この点から、私はわれわれの商業技術について語ることにしたい。それは、正しく考察する者にとっては、人類の増加が地上に広まったのち、自然にその起源をもっている。個人と家族を維持するためには多くの事物を増やすことが必要であったので、男は女と一緒に暮らすようになり、最終的に、国家の市民と為政者になると、三つの状態、すなわち、個人、家族人、公人のいずれをも維持することができたのは、自分が必要としていた事物を、たまたま彼には余剰があり、他の人々が必要としていた事物と交換したからである。というのは、そのときにはまだ、人間の才智によって、貨幣の使用が発見されていなかったからである。続いて貨幣が一般的な手段になると、この貨幣の使用以前に、最初に必要とされていた物々交換はなくなった。

そののち、人間が増加し、その本性によって、活動が広がってくると、彼らは、この一般的な手段によって、現在も未来も、自らのすべての必要がより満足させられることを理解した。あらゆる時とあらゆる場所で有効である一般的な手段によって、人間の生活に必要な事物が、日々の交換によって手に入れることができる。こうして彼らは、貨幣という手段を見いだしたのであり、それに、泉から湧き出るように、商業の原理が由来するので

ある。

そして、われわれの主題について言いうるのは、自然的本能によってあらゆる知識とあらゆる学問とあらゆる技術が原理をもっているのであるが、あるものは、上述の真なる結論にもかかわらず、上述の事柄の実際的な使用と実践によって自らを増加させ、増大させることが示されており、そのことは先に述べた例から見てとれるとおりである。

そして、われわれの主題に戻ることにして、われわれが述べたいのは、目下のところ、この著作で論じようと意図している商業技術は、上述したように自然にその起源をもっているが、それにもかかわらず、人間の生活に属する事柄の必要性によって駆り立てられ、その使用によって広がり、多くの世紀を経て現代にまで到達したということであり、このようにして、確実に言いうるのは、その最初で真の起源は自然に属しており、続いて、人間の分別によって、拡張され増大させられ、その結果、商業技術とその実践によって、個々の人間だけではなく、また家族、一族、共和国、公国、王国、帝国もまたきわめて容易に自らを治めることになったということである。

そして、現代まで行われてきたこの活動はいかなる学知でもないように見えるが、しかしながら、そこには、不断の活動によって、使用と実践と慣習が見いだされるのであり、それがこのような本性に属しているので、それに忠実な人々においては——私の見るところでは——それについて与えることができる、いかなる学知よりも優っているであろう。そして、私が思うには、このことが、きわめて自然で、きわめて必要で、きわめて有益なこの技術について、これまでいかなる規則も書かれることがなかった理由である。そして私も、もし日々の実践をとおして、この活動にあたって同時代の商人たちが毎日犯している無秩序と逸脱に気がつき、明らかに感じとり、見てとらなかつたならば、同様に沈黙したままにいただろう。このことが、私が「商業技術」について論考に相応しい仕方で、世界の創造から現代まで、いかなる著作家によって試みられなかつたことを書き記すように促された、最も強い理由である。

第2章 商業の本質と定義について

自然的な秩序を護るために、われわれは商業とは何かについて述べなければならない。というのは、キケロが述べているように¹⁶、われわれが事柄を理解しようと望むならば、定義から始めなければならないからである。そして、商業が何であるかを論じるにあたっては、先に進む前に、無知な商人たちに困難を与えるような疑念を最初に振り払うために、これら二つの言葉、すなわち「取引」(mercantantia)と「商業」(mercatura)の区別について述べておきたい。「取引」という言葉においては、売ることと買うこと、交換すること、何らかの仕方で取引することすべてが理解される。一方、「商業」という名称によっては、技術あるいは学芸、あるいは別の仕方で、規則と慣習の秩序づけが理解され、それ

によって、上述した商業に関する事柄が遂行され、交渉されなければならない。

それゆえ、「取引」という言葉が取引する交渉に関わるすべての事柄を含んでいることが明らかになったので、「商業」の定義へと進まなくてはならないように思われる。それをわれわれは次の様に定義する。すなわち、商業とは、「人類の維持のために、そしてまた利得を望みつつ、商売的な事柄において正しく秩序づけられた、立派な人々の間の技術、あるいは学芸」である。そして、このことにこのわれわれの著作全体の基盤が存しているので、商業の定義に含まれるすべての要素について少しより明確にすべきであると思われる。そして、われわれは、この区別が——われわれの見方によれば——完璧であるように見えると言いたい。というのは、そこには一般的な類と、個別的な種が含まれているからである。その一般的なものとは、「技術」あるいは「学芸」と呼ばれるもので、それはある目的へと向けられた規則の集合体をまさに意味する。その種とは、上述の定義に含まれる残りのものすべてであり、それらについては以下で明らかにしたい。

商業が許されていない人々には二種類あり、まず、この技術の遂行が不評を買い、禁止されている人々で、すなわち、王、君主、封建領主、騎士、紳士、そして、市民法とユスティニアヌス法典の商業の箇所の規定によって、商業的行為の遂行が禁じられているすべての貴人たちである。法典には次のように述べられている。「われわれは高貴な生まれの者たち、その誉れの輝きによって際立っている者たち、大きな富を得ている者たちが危険な商売を行うことを禁じ、平民と仲買人がより容易に売買し、取引ができるようにする」¹⁷。

商業が許されていない別の人々は、聖職に就いている者である。このことは使徒パウロが『テモテへの手紙二』で断言している。「神のために戦う者はだれも世俗の商売に巻き込まれてはならない」¹⁸。ヨハネは『区分』88でこう述べている。「ペストを恐れるように、聖職者は商売を、貧者から富者になることを、謙遜な者から高慢な者になることを恐れなさい」¹⁹。そして、最初の類型に属する、これら二種類の者たちは彼らの威厳の点で相応しくはない。

第二の類型は商業が不可能な者たちで、彼らは能力や人物の点での欠陥や、彼らが行いたいと欲している取引の点での欠陥を有している。人物の点で欠陥があり、不可能な者たちとは、正規の年齢に達していない少年、あらゆる年齢の女性、庇護者の下にある子ども、召使い、狂人、浪費家、その他の無知で無能な者たちである。他方の不可能な者は、売買品の欠如によるもので、すなわち、泥棒、追い剥ぎ、偽金造り、錬金術師、彼らに類似した者である。

「正しく」ということで、われわれは、商業の対象となる事物が正しい、あるいはそれに近い価格で売買される、ということを理解している。さもなければ、共通の法に従って、契約は維持されなくなる。とりわけ、正しい価格の半分以上を超過した場合はそうである。そして、この正しさについては、第10事例第2問題においてきわめて詳細に論じられて

いる²⁰。

「商業的な事柄において」ということは、商業上で取引できない事物を区別するために述べられている。これらの事物というのは、聖なる事物、質入れされた、抵当となった、あるいは盗まれた事物であり、あるいはいつでも、いかなる時でも、だれに対しても禁じられている毒物や、賭博の骰子や同様な事物であり、あるいは私用や家族で用いるための、あるいは他者に贈るために購入された事物である。

「人類の維持のために」ということを、われわれが付け加えたのも理由のあることである。というのは、最初から、すぐに人類の増加によって、この商業技術は、ある者には欠いており、ある者には余分にある事物の必要性から使用にいたったからであり、貨幣の使用が見いだされる以前には、物々交換がその起源だったからである。それにも関わらず、この手段の発明ののちは、自然が最初に、そして人類の必要と維持のために導いたものは、上述したように、この必要性を満たしたので、次に商人たちは、利益という望みをもってこの技術を実行し始めたのである。これと同じことは衣服の使用において起こった。衣服は最初、粗雑で質素なものだったが、その理由は、人間の皮膚を覆い、人間の身体を、ひどい暑さ、ひどい寒さ、そして同様に、雨、雪、氷、その他の人間本性を害するものから護るためだけのものだったからである。

そして、人間の必要性に応えた最初の発明ののち、粗雑で質素な、いかなる装飾もなかった衣服は、装飾され美しいものへと変化し、多くの装飾によって現代の、それを見て驚くようなものへと発展していった。そして、これと同じことが商業において起こったように思われる。商業は、上述したように、自然によって、また人間の必要性という要請によって秩序づけられ、そののち多くの世紀を経て、商人にとってきわめて有益であることが分かり、この有益さのおかげで、多くの驚くべき革新をもたらしたのであり、そのことは——本稿が進むにつれてより明らかになるように——良き、そして最高の商人にとってのみ信じることである。

そして、この探求はすべて、われわれが「最初から人類の必要性によって秩序づけられた技術あるいは学芸」と述べた、商業の定義の部分を明らかにするために、続いて商人たちに有益さをもたらした貨幣の発明、そして利益の望みを伴った、その実行という目的を明らかにするためだけに為されたのである。そしてわれわれが付け加えるのは、「必要性に駆られて売る人々とは異なる者たち」、すなわち、彼らの一族の利用のために、あるいは、商業の主要な営為である、再販売とは別の目的で買う者たちである。しかし、彼らは商業的営為を行ってはいるが、商人と呼ぶことはできない。というのは、アリストテレスは『経済学』において、商人の目的は利益を上げ富むことであると述べているが、彼らはそれを遂行する者の利得という、この技術の然るべき目的には関係しないからである。

第3章 商人という個人の性質について

卓越した作家たちによる、古代の著名な見解では、より下位の事物は、超天界的な物体の影響によって支配されており、後者はすべての下位の事物を、それらに規則と限度を付与する、神によって授けられた秩序によって治めることができるのであり、その影響から自らを護ることができるのは、神によってこの特権を与えられた唯一のものである人間だけである。人間は星位のさまざまな影響によって、ある行為よりも別の行為へと向かわされるが、それにも関わらず、魂の創造のときに付与された自由意志の尊厳によって、人間はきわめて自由であり、その結果、さまざまな星位の多様性によって、さまざまに向かわせるあらゆる性質や能力に抵抗することができる。そして、このことについては、プトレマイオスが作った、よく用いられ引かれる格言、すなわち「智者は星辰を支配する」において現われている。

広範囲に及ぶこの影響に抵抗しうることは困難ではあるが、それにも関わらず、とりわけ、他の者たちにまして、卓越した才智が具わっている人々にとって、それを行いうることは不可能ではない。というのは、彼らは自らの知慮を働かすことによって、この影響に抵抗し、この影響によって引きずられることも、支配されることもないからである。しかし、もしこの抵抗が無理やりに行なわれ、上述の超天界的な影響によって自然本性的に向かうのが見いだせる活動とは異なる活動へと転じるのであれば、ほとんどの場合、自らを維持できないだろう。

それゆえ、初めに、自らの息子、あるいは他の親権がある子、もしくは親類縁者の子をこの商業的活動へと向かわせることにおいては、とくに留意しなければならない。というのは、もし彼が他の活動、あるいは反対の活動に向いていたならば、彼は成功するにしても偶然であり、前進するのは困難だろうし、同じ道に留まって、利益は少なく、そして、名誉をもって富を得るといふ、自らの願望の目的に到達できないだろう。それゆえ、あなたが同様な活動に向けようと欲している者である、その子どもの年齢を鑑みて、彼が本性的に向いている活動についてよく考えてみる必要がある。

この傾向について知識を得るのには、まだ墮落していない少年期に、彼が好きな活動について、そして彼が自然と時を過ごしているものについて、とくに考察することが重要である。そして、もし彼が生气に満ちており、外見が良く、優れた性格で、気紛れなところも浮ついたところもなく、名誉や利得や戦いの勝利を得ることを欲するのならば、われわれは彼が、名誉をもって富むことが目的である、この活動に適していると見なすことができる。そして、もしわれわれが、この傾向を、われわれの子や、他のわれわれに関わっている子に見いだすならば、われわれは、彼に適している活動へと向かわせるべきであり、自然と競合して、それを負かし、あるいはそれを超えようと欲してはならない。というのは、自然はあらゆる頑強な人間をも打ち負かすからである。

そして、このことについて、われわれの間には巨人族の例がある。詩人たちの寓話によれば、彼らは自らの巨大な力を過信して、ユピテルの王国を倒そうとしたが、ユピテルの雷電によって撃たれ、滅亡した。この寓話の解釈については、われわれのトゥッリウス〔・キケロ〕が同様な寓話について、とりわけ次のような言葉を述べている。「巨人族が行ったように、神々と戦うことは自然に刃向かうことにはほかならない」²¹。

われわれはギリシア人とローマ人の中に他の例をもっている。彼らは、両方の国が繁栄していた時代に、自らの息子たちと親族を、自然が定めるような活動へと向けさせるという規則を用いていた。その結果、その時代の両方の国において、あらゆる賞讃されるべき活動において、それ以前に存在したことがなく、それ以後にも存在することがないような、きわめて卓越した人々が開花したのである。

このことについては、あらゆる自由学芸と熟練的技芸の例において明白に見てとれる。さらに哲学において、われわれはギリシア人の中に、多くのきわめて偉大な哲学者をほとんど限りなく見いだす。その主要な者はピュタゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスである。数学的な事柄に関しては、エウクレイデス、アルキメデス、プトレマイオス、そのほかに多くの同様な者がいる。詩においては、ホメロス、ヘシオドス、パキヴィオス²²がおり、われわれの中には、ウェルギリウス、オウィディウス、ホラティウスがいる。雄弁術においては、デモステネス、アエスキネス、ホルテンシス、キケロがいる。歴史においてはトゥキディデス、ヘロドトス、ポリビオス、リウィウス、コルネリウス〔・ネポス〕、タキトゥス、ユスティヌスがいる。そして絵画においては、アペレス、ゼウクシス、そして他の多くの同様な者がいる。彫刻においては、ペイディアス、プラクシテレスがいる。そして軍事的な事柄においては、アレクサンドロス、リュシマコス、カエサル、スキピオが、それに加えて蛮族においては、ハミルカム、ハズドルバル、ハンニバルがいる。

そして私には、アラバングのアポロニオスの見解を賞讃するべきであると思われる。彼はアテナイへと、弁論術を教示するように招かれたときに、この活動に向いている者と判断した場合には、喜んで彼を受け入れたが、一方、この活動に不向きで、その能力もない者と認めた場合には、他の活動に臨むように促して、時間の無駄にしないために彼に教えるのを断ったのである。

それゆえ、上述したように、自然的な傾向性を所有している、このような子どもは、商業技術を教えられるべきではあるが、別の条件を具えていなければならない。すなわち、その条件は疑いもなく、経験によって知られているばかりでなく、自然の道理によって是認されているものであり、つまり、彼が商人から生まれたということである。というのは、以下に述べるように、自然的な種子によって、父から息子へと、形姿や類似の多くの印象が伝えられ、同様にまた、内的な魂においても多くのものが伝えられるからである。それについて、詩人のチェッコ・ダスコリは、かの哲学者〔アリストテレス〕から借用してこ

う述べている。「外観は心の性質を明示する」²³。そして、外観が内面を明らかにするならば、そして外観が種子の力によって、父親の形姿の中に引き継がれるならば、その結果として、内的な力能が父親に類似することは疑う余地がない。

そして、これについての無数の経験については傍に置いて、たしかに私の中には、父の痕跡が多く見られ、確かめられる。それは実際の事柄だけではなく、また運命に対しても、語るにも驚くべき一致が私に起こっている。子どもに対しては、生まれたときから、然るべき時まで助力を与えなければならず、揺籃期からその学知の規則と秩序に従って教えなければならない。それについては、クインティリアヌスが彼の著作の最初に、「いかにして雄弁家がつくられるべきか」を教示している²⁴。すなわち、その子どもと会話する乳母とすべての者については、雄弁な者を選ばなくてはならず、こうして、乳母からは乳とともに純粋で優雅な言語を飲まなければならない。そして、家にいる家庭教師からは、幼い頃から雄弁を学ばなければならない。

そして、われわれは商人についても同様に述べなければならない。すなわち、商人にはとっては、子どもの頃から商人の振る舞い、作法、習慣、会談を飲みこみ、あらゆる振る舞いと行為において滑らかで冷静でなければならない。それゆえ、グラックス兄弟の母であるコルネリアは、子どもたちを雄弁さによって大いに助けたと伝えられている。そして、お互いに助け合う、これら二つの条件が結びつけられ、そしてそこに、秩序づけられた学知の、および上述された活動の不断の習慣の規則が付け加えられるならば、完全な商人がつくられるであろうし、また、とくにもし幸運に恵まれ、助けられるならば、驚くべきことに、自分の願望の目的を達成することだろう。幸運は、ほとんどいつも、賢慮を用いて、理性の秩序どおりに自らを治める人々を加護するのが常であり、反対に、ほとんどいつも、理性を欠き、秩序を欠いている人々を見捨てるのが常である。それゆえ、次のような格言が生まれた。すなわち、一般に「幸運は愚者の家を訪ねないし、もし来てもほとんど留まらない」と言われている。そして、たまに自らを治めることができない者が上手くいくときがあるが、これは珍しく、偶然的なことで、稀にしか起こらない。この者は、規則にも例にも訴えることなく、むしろ反対の秩序に従っているのである。

そして、商人という個人の性質について上述した事柄は、魂の状態だけに関係していたので、身体の状態について簡単に触れておかなければならない。これについてわれわれが述べたいのは、根本的な基礎である、魂と精神の良き状態が目的の達成にとってほかに優れた成果をもたらすのであるが、しかしながら、身体能力もまた求められ、そして必要なものである、ということである。

それゆえに私は、この章のタイトルを「個人の性質について」と名づけたのである。というのは、「個人」という名称は魂と身体を意味するからである。そして、読者にとって、身体の資質を論じるこの箇所が無駄で、余計なものと思われるのであれば、そして、商業活動でのこの役割がいかなるもので、いかほどのものなのかを考えていただきたい。そう

すれば、しばしば驚嘆が思い浮かび、この箇所は無駄でも余計なものでもなく、それどころか、有益で必要なものであると判断するだろう。この商業技術が向けられている目的の遂行のために利益をあげようと欲する者にとっては、あらゆる他のことは脇に置いて、この職業に有益で役立つものとなりうることをすべてを、きわめて熱心に追求しなければならない。

それゆえに、しばしば、昼も夜も大きな労苦に耐え、徒歩あるいは馬に乗って歩き、海上と陸上を進み、そして売ることと買うことに、また売却品と購入品を案配することにたいへん苦勞し、そして、これらに類似した仕事をできうるかぎり入念に行うことが起こる。その際には、上述したように、付随的な事柄だけではなく、また人間の生活の維持にとって必要な事柄も含めて、他のすべての配慮を脇に置くのである。そしてときには、食べること、飲むこと、眠ることを遅らせ、それどころか、飢え、渇き、睡眠や、身体の休息にとって有害で、それに反する、他の同様な事柄に耐える必要がある。もし身体がこのような器官として機能することがなかったならば、それらに耐えることができないだろうし、もし耐えたとしても、不具合を蒙ることによって、必ずや病気が、そしてついには死が続くだろう。

そして、二つの不都合のうちの一つが起こることになるだろう。まず、必要とされる同様な活動を行わなければ、求められている利益をあげることがなく、名誉をもって望まれた目的に達することないだろう。あるいは、たとえ利益をあげることができたとしても、身体の不具合のためにそれを維持することはできないだろうし、そして、たとえ維持することができたとしても、病気と死に陥るだろう。

これら二つのどちらも極端なもので、不都合は大きく、避けるべきものであるが、われわれは、同様な活動に適した、良き状態の身体を保つことはきわめて有益であり、それどころか必要であると述べ、宣言したい。身体は、目的を遂行するための活動において、適切な道具として働くのであり、それは、釘を打ったり、他の作業をするときに、ハンマーが然るべき工具として働くのと同じである。そして、精神と魂は、職人が自分の製作物の比を司るように、身体を司るのである。

そして、われわれは、身体が労苦に耐えるのに慣れなければならないと述べたのだが、ここで私は、アリストテレスが『倫理学』第2巻で教示しているように²⁵、極端はすべて悪であると述べたい。すなわち、きわめて頑強であり、商人の能力を超えるような労苦を果たすことができる多くの身体が存在するが、たとえ彼に労苦に耐える資質が具わっているように、私は彼が適任な者であるとは言わない。というのは、一般的に、頑強で力強い者たちは、その本性上、知性的な能力に欠けているからである。というのは、哲学者たちの見解に従えば、自然はある事柄に欠けている者を別の事柄で補うからであり、そのことをアリストテレスは、柔軟な肉体は把捉しやすいが、その反対は逆である、と述べている²⁶。

したがって、商人は労苦に耐える者でなければならないが、柔軟で繊細な肉体をもって

いなければならない。それが知性の高貴さを証明する。私は、この活動に不適當である弱い身体について語っているのでも、強く、頑強で、頑丈な身体について語っているのでもない。後者は一般的に、知性を欠いた、野獣に近いもので、成果も乏しく、商人にはまったく反するものである。それゆえに、有名な確言が言われるのである。「強い男は家族の破滅」。

第4章 商人に適した場所について

道徳家のセネカが「場所は人をつくらない」²⁷と述べてはいるが、それにも関わらず、たしかに場所が人をつくらないとしても、商業的な取引は場所の効力に依存し、したがって、商人は商業に適した場所を選び、適さない場所を避けなければならない。というのは、商人が住んでいる場所は、商人の繁栄と破滅に大きな影響をもたらすからである。このことは多くの者にほとんど理解されておらず、常にその反対に、一般的に無知で、この技術の新参者たちは、住民の少ない場所、そして安く生活することができる場所、あまり商人がいない場所を選ぶのが常である。

私が言いたいのは、商人が活動するのに適している場所には、第一に、健康に良い空気があることが必要である、ということである。それは人間の生活にきわめて有益であり、彼は健康となるが、反対に空気が汚染されている場所では人間に害を与え、しばしば重大な病気を引き起こし、その結果として、収入の損失と利得の喪失をもたらす。

第二に、その場所は商人たちと紳士たちにとって住み心地がよく、通われていなければならない。というのは、軍人は自分が雇われている場所において、軍隊の活動で自らを誇示するように、商人は商人たちが行き来する場所に住んで、日増しに理解を深め、活動的になって、その結果として、より裕福になるからである。そしてさらに、多くの商人が住む場所においては、そこで商業上の習慣や作法を深く観察することができ、その場所で多くの富を得ることはできないかもしれないが、しかし、貧乏になることもほとんど不可能である。というのは、そこには常に多くの生活の糧と庇護が存在し、それによって商人は援助され、支援され、その結果として、倒れることはないからである。

第三に、平和で、恐怖のない生活する場所に住むべきである。というのは、キケロが『指導者を選ぶことについて』²⁸という弁論で述べているように、とりわけ、戦争は人間を不幸にするが、商業には戦争の恐怖や疑念はない。というのは、商人は自由であり、平静で動揺しない魂をもっているからである。

第四に、商業上の道理が保たれており、ユスティアヌスの法律に基づいているのではない場所に住むべきである。というのは、商人にとっては、あらゆる事柄において利得の敵である法律家たちの論議はほとんど問題とならないからであり、また、商業上の事柄は簡潔さと迅速な実行が必要とされるが、それは法律家たちにとってはまったく反対だからで

ある。そしてまた、商人たちの間では商人たちの私的で単純な書法が信頼されるのが常であるが、それは法律家たちにはまったく無縁のものである。

そして、他の多くの事柄はすべて、古代の法律とはまったく矛盾している。法律は聖なるものでも、それ自体において正しいものでもなく、多くの現代の法律家の欲望のおかげで破壊され、虚偽と論争に変えられている。事柄の核心を理解すべきときに、それに結ばれていた糸を解くべきところで、むしろ法律はそれらを虚偽と論争、あるいはむしろ崩壊へと変容させている。そして、商業上の規則の一つは、判断者たちが正義の厳格さに基づいてはならず、処罰へと進んではならず、公正と中庸に拠るべきだということである。

第五に、商人は広く、人々で溢れかえる場所に住むことを避けなければならない。そのような場所は一般的に、多くの商会在機会を狙っており、商人にとってはきわめて危険で、しばしば失敗に終わる。そして、私の経験から、外国人の商人が活動してもほとんど失敗に帰する同じような場所が存在している。たとえば、バレンシアの王国は、本来は豊饒な土地であるが、私の時代には、そして私が過去に試みたかぎりにおいては、ほとんどの者が、自らの目的を果たすことができず、失敗していた。カラブリア地方と、シチリアの多くも同様であり、ここでは、食物に関わる大きな事業を企てたとしても、けっして成功することはない。このことについては、しっかりと心に留めておかなければならない。なぜなら、それらの土地は本性的に悪いからである。

そして、あなたは、場所の特性と広さにしたがって、商売においてさまざまに着手する多くの場所を見ることになるだろう。これらのある場所では、人々の財産は一般的に、500ドゥカード以上を超えることはなく、そして、いかに努力しても、けっしてそれ以上には達しないように思われる。そして、彼らがそれを超えるときには、高利貸しの餌食となり、結局、壁を塗るか、大地を耕すことになるだろう。ある場所では彼らの財産は1000ドゥカードを超えず、またある場所では3000ドゥカードを超えず、またある場所では10000ドゥカードを超えず、場所によってさまざまである。そしてこのことは、まさに場所の特性によって生じるのである。

もしあなたが、商人の目的、すなわち、アリストテレスが述べるように、富むことを追求するならば、そこに住み、商業的な活動が行っている人々が大きな利得を得ているような場所に住むように努めなさい。それゆえ、次のような格言が流布しているのである。「大きな池で、大きな魚は獲れる」。こうして、あなたは大きな仕事を企てることができ、その結果、名誉と富を得ることができる場所に住まなければならない。

第5章 物々交換の取引について

われわれの論考を順序立てて進めるために、われわれは商業という仕事という行為と実践について語ることにしよう。最初には物々交換についてであり、それは商業の最初の

基本的な部分であり、古代には「取替」と呼ばれていた。取替は第一には、品物と品物を単純に、貨幣を介入させることなく取り替えることに存しており、第二には、一方から他方への貨幣の受理も含む、事物と事物の取り替えに存している。

取替の第一の仕方についてわれわれは、両方の側の都合の良さのために導入されたと理解しなければならない。その際に、両者ともに、自分のところに所有する品物を処理しようとして欲しているが、貨幣によって払うことができないので、必然的に、自らの願望を実現するためには、事物の物々交換という第一の仕方によって、すなわち、彼らが先に所有していた事物を、彼らが容易に、より迅速に、より効果的に処理できると信じ、確信した別の事物と物々交換しなければならない。私が思うには、物々交換というこの第一の仕方は、両方にとって好都合であるがゆえに見いだされたもので、それについてわれわれは、毎日、明白な例を見ている。

そして、この規則の明白な証明は、事例によって巧みに行われるので、われわれは物々交換の便利さと必要性を示す場合を取り上げたい。フィレンツェの商人たちはたいてい、織物と布地をシチリア王国に持ち込み、それらを現金で売りさばこうとするが、しかし、現金が用意されえないことが、とりわけ、売却するのに長い期間がかかる商品にはしばしば起る。商人たちはシチリアで自らの品物と一緒にあり、それを売りさばこうとするが、現金をあてにできないので、無為に時を過ごし、旅を無駄に終わらさないために、もし自国にもって帰ったならば、自らの織物と布地よりもはるかに高く売れる事物との物々交換を行おうと思いつことが起る。

そして、物々交換を行おうと欲して、上述したように、仲買人を通して、あるいは別の仕方ですら自らの品物を、フィレンツェ人にとって、祖国では織物と布地、他の同様なものよりも重宝される小麦と物々交換しようと試みる。一方、仲買人は自ら探り出して、上述の品物をシチリア人の小麦と物々交換しようと試みる。彼らは多くの小麦をもっていて、それを売りだそうとしているが、現金をもっていないので、フィレンツェ人の織物と布地を物々交換するように促される。彼らには、小麦を所有しているよりも売りさばいた方がはるかに有益なのである。そして、この形式において、物々交換の第一の仕方の有用性が理解される。

そして、ときおり、現金が調達できず、物々交換を行うのが困難なことが生じる。この場合には、両方の側に同じ利益をもたらすために、現金を補填するという物々交換の第二の仕方を見いだされた。この現金の補填は、他の方法では達成できなかったであろう、この取引の完遂の条件である。そして、この商売の最初の種類においては、物々交換では多くの詐欺にかかり、ときには大きな損失を蒙ることに注意を払うべきである。それゆえ、商人たちの間には、「物々交換する者は物々交換される」という格言が生まれたのである。必要な他の事柄の中では、あなたが物々交換で買う商品が、あなたが売る商品よりも、あなたにとって有益で、処理しやすいということに注意しなければならない。

第二に、あなたは相手よりも価格で上回るように努力しなければならない。そして、この第二の部分の巧みに達成しようとするならば、あなたのお麦が現金でいかなる価値があるのか、そして物々交換でどれほど上回ったのかを、そしてどの程度、物々交換によって相手を現金で上回るようになったのかを、常に計算しなければならない。それは織物についても同様に言える。そして、これを考察したのちに、誰がより有利に物々交換をしたのか、どの程度有利に物々交換したのかについて推測しなければならない。この場合に、あなたは、自分が物々交換を行った商品の価値を考慮しなければならない。その取引が行われた場所においては価値が低いかもしれないが、あなたがそれを持ち込む場所において判断しなければならない。というのは、その場所以上に、あなたがよりよい条件において、再販売することはないだろうからである。そして、これら三つの考察をすべて行ったらば、あなたは精査して（すべてを吟味して）、物々交換の結論を出さなければならない。

さらに、あなたはできるかぎり、先に相手があなたの品物に値段を提示するように努めなければならない。あなたの相手が自らの品物に期待しているものを彼に言わせるようにすることに慣れなさい。というのは、このことにおいて、普通は欺かれることがないからである。われわれの品物の価値について、さまざまな状況における有利と不利に照らして適切な価格を述べようとする場合に、われわれは容易に押し量ることができる。というのは、相手は自らが価値が高いと見なしたものを売ることに自信があり、彼が海や陸地を運んで品物を売ることによって得るものに基づくよりも、自らの品物の価値を高めて、大いに評価するからである。相手がそれを成功すると考えることは、悪いことではまったくくない。しかし、あなたが物々交換しようと欲するならば、相手に対しては、常に適正な値段を提示しなければならない。

第四に、あなたは、もし可能ならば、現金をもち、支払うように留意しなければならない。そして、もしもつことができなければ、少なくとも、相手に現金を支払わないように努めなければならない。そして、現金で補填する必要がある場合には、あなたは、私が補填した現金によってどれだけの小麦を所有することになるかをしっかりと計算し、確かめなければならない。彼は私と、物々交換をもとに取引したのであり、彼はいつそう私と物々交換を行おうとする。したがって、あなたはいかほど現金が補填されたのかを承知し、品物の価値について把握し、つまりは、あなたが得たものを調べ、計算しなければならない。そして、このようにして、叙述した状況を検討するならば、常に、あなたの企図は成功し、物々交換はあなたを益するだろう。

そして、この序論において、物々交換と取替については十分に述べたので、現金による商品の取引に移るべきだと私には思われる。

（続く）

付記：本稿は令和5年専修大学研究助成（個別研究）「研究課題 ベネデット・コトルリ『商業技術の書』の研究」の研究成果の一部である。

¹ 参考文献については、拙稿の註を参照していただきたい。ここでは邦語文献として、イタリア・ルネサンス史の観点から大黒俊二氏の、会計史の観点から片岡泰彦の研究を挙げるに留めたい。大黒俊二「『商売の手引き』、あるいは中世イタリア商人の『実務百科』」、中村賢二郎編『都市の社会史』、ミネルヴァ書房、1983年、244-269ページ；「ラゲザの人、ベネデット・コトルリ——生涯と作品——」、『人文研究』（大阪市立大学文学部紀要）、第37巻第9分冊（1985年）、1-40ページ；「『完全なる商人』、あるいはルネサンス商人の『百科全書』」、中村賢二郎編『歴史のなかの都市——続・都市の社会史』、ミネルヴァ書房、1986年、338-359ページ；『嘘と貪欲——西欧中世の商業・商人観』、名古屋大学出版会、2006年；「ベネデット・コトルリのフィレンツェ体験——『商業技術の書』の書——」、『西洋史の諸相における文化的ボーダーランドとマージナリティ』、平成15～18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書、研究代表者：田中きく代（関西学院大学文学部教授）、2007年、23-32ページ；「ルネサンス・イタリアの商人形成：ベネデット・コトルリ『商業技術の書』を手がかりに」、『企業会計』、第70巻第1号（2018年1月）、69-75ページ。片岡泰彦「ベネデット・コトルリの「世界最初の複式簿記文献」について」、『会計』、第150巻第2号（1996年8月）、125-137ページ；「ベネデット・コトルリ「簿記論」再考（一）」、『会計』、第158巻第1号（2000年7月）、83-95ページ；「ベネデット・コトルリ「簿記論」再考（二・完）」、『会計』、第158巻第2号（2000年8月）、261-276ページ；『イタリア簿記史論とドイツ簿記史論に関する考察』、大東文化大学経営研究所、2003年；『複式簿記発達史論』、大東文化大学経営研究所、2007年；「複式簿記の生成・発展と「パチョーリ簿記論」

への展開」、千葉準一・中村常男編『会計と会計学の歴史』（「体系現代会計学」第8巻）、中央経済社、2012年、33-71ページ。

² Cotrugli, *Libro de l'arte de la mercatura*, 3, 3, p.130.

³ Cotrugli, *Libro de l'arte de la mercatura*, 1, 2, p.45.

⁴ *Dubrovčanin Benedikt Kotoruljević. Hrvatski I svejetski economist XV. Stolijć*, Zagreb: Hrvatiki HAZU, 1996

⁵ Benedetto Cotrugli, *Il libro dell'arte di mercatura*, a cura di Ugo Tucci, Venezia: Arsenale, 1990. 本書については大黒俊二氏が優れた書評（『イタリア学会誌』、第43号、1993年、219-227ページ）を書いている。

⁶ Tiziano Zanato, "Sul testo della «Mercatura» di Benedetto Cotrugli (A proposito di una recente edizione)," *Studi Veneziani*, N.S. 26 (1993), pp.15-65.

⁷ Bendikt Kotrulj, *Libro del arte dela Mercatura. Knijga o vještini trgovanja*, Priedila I prevelar Zdenka Janeković-Römer, Zagreb – Dubrovnik: HAZU, 2009

⁸ Benedtto Cotrugli, *Libro de l'arte de la mercatura*, a cura di Vera Ribaud, Premessa di Tiziano Zanato, Venezia: Edizioni Ca' Foscali – Digital Publishing, 2016.

⁹ Carlo Carraro, Giovanni Favero (eds.), *Benedetto Cotrugli—The Book of the Art of Trade*, With Scholarly Essays from Niall Ferguson, Giovanni Favero, Mario Infelise, Tiziano Zanato and Vera Ribaud, Clam (Switzerland): Palgrave Macmillan, 2017.

¹⁰ Benedetto Cotrugli, *Libro dell'arte di mercatura*, la edizione con testo in italiano contemporaneo, Introduzione di Marco Vitale, Con scritto di Carlo Carraro, Tiziana Lippiello, Fabivo L. Sattin, Edizione critica a cura di Vera Ribaud, Milano: Guerini Next, 2022.

¹¹ *Traduict de l'italien de Benoita Cotrugli raugean*, par Iean Boyron … Lyon, par les héritiers de François Didier ; 27 Oct. 1582.

¹² Benedetto Cotrugli, *Traité de la marchandise et du parfait marchand*, Traduction de l'édition de 1582, Édité par Luc Marco ete Ropnbert Noumen, Paris: L'Hrmattan, 2008.

- ¹³ トマス・アクィナス『アリストテレス「靈魂論」注解』第2巻第4章（n.272.）を参照。
- ¹⁴ キケロ『マニリウス法弁護』17。
- ¹⁵ アリストテレス『政治学』第4巻第4章（191b）。
- ¹⁶ キケロ『義務論』1, 2, 7.
- ¹⁷ 『ユスティニアヌス』4, 63, 3.
- ¹⁸ 『テモテへの手紙二』2, 4.
- ¹⁹ 聖ヒエロニムスの誤り。ヒエロニムス『書簡集』LII, par.5.
- ²⁰ 以下を参照。『グラティアヌス教令集への註解（ロサリウム）』ad Ca.10, q.2, c.2.
- ²¹ キケロ『老年について』2, 15.
- ²² おそらくは、ピンダロスの誤り。
- ²³ チェッコ・ダスコリ『ラチェルバ』2, 3, 1. 偽アリストテレス『人相学』811b.
- ²⁴ クインティリアヌス『弁論家教程』1, 1, 4-8.
- ²⁵ アリストテレス『ニコマコス倫理学』2, 6, 1107a. トマス・アクィナス『命題集』2, d. XXVII, q.1, a.1.
- ²⁶ アリストテレス『靈魂論』2, 414bss. トマス・アクィナス『アリストテレス「靈魂論」注解』2, 1.19, n.483.
- ²⁷ セネカ『書簡集』CIV 7.
- ²⁸ キケロ『マニリウス法弁護』（『グナエウス・ポンペイウスの支配権について』）15